

二〇一八年度

聖園女学院中学校 入学試験問題

国語

(時間 五十分)

〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図があるまで中を開いてはいけません。
- 二、受験番号・氏名を解答用紙の定められた欄にかならず記入しなさい。
- 三、試験問題の印刷がはつきりしない場合には手をあげなさい。
- 四、解答は解答用紙に記入し、解答用紙のみ提出しなさい。

一次

- 一、次の——線部をひらがなに直しなさい。
- (1) 屋外にあるプールで遊ぶ。
 - (2) 太古の生物の化石を見つける。
 - (3) 従来どおりに行う。
 - (4) バスを停留所で待つ。
 - (5) くつを磨く。

二、次の——線部を漢字に直しなさい。

- (1) はいごから声をかける。
- (2) 母のちゅうこくを聞く。
- (3) かんだんの差が激しい。
- (4) 選挙でだいたいようりようを決める。
- (5) 機械を自由にあやつる。

三、次の文章を読み、後の各問に答えなさい。

サクラソウという花があります。早春に咲くとてもきれいな花です。江戸時代は平和な時代が長く続いたこともあり、江戸では園芸が発達し、サクラソウもさまざまな品種改良がされました。サクラソウはそのように長いあいだ日本人に愛されてきた花ですが、昭和の後半くらいになって自動車が普及するようになると、野生のサクラソウが盗掘^①されてどんどん減りました。それだけでなく、サクラソウが咲く湿地が開発されてサクラソウが消えてゆきました。私も山でサクラソウに出会うことがめっきり少なくなっていました。

植物の好きな人は花を花瓶に活けて楽しめます。でも水につけておくだけでは、あとは花びらが散るのを待つだけです。もう少し植物の好きな人は「鉢物^{はちもの}」を好みます。鉢に植わった植物は根を張っていますから、花瓶の花と違って育ちます。葉を開き、つぼみをつけて、花が咲いてゆくようすを見るほうが、はるかに楽しみは大きいものです。サクラソウの場合は水を好むので、冬のうちから水の管理をするなど、手をかけて育てますから、春に葉を出してつぼみをつけたときの喜びもひとしおです。

しかしそうして手入れをしても、そのままでは株の寿命が来れば枯れていきます。その点、受粉して種子ができれば、繰り返し育て、増やすことができます。

鷺谷^{わしたに}いづみ先生はサクラソウの研究をして、たいへん重要な発見をしました。それは、大きなサクラソウ群落ではたくさんの種子ができていたのに対して、^⑤群落が小さく、しかもまわりにほかのサクラソウ群落がない場合には、花は咲いても種子ができていなかったのです。株の大きさや葉の状態にはかわりがなく、小さな群落でも光合成などは順調におこなわれていて、花もちゃんと咲いているのに、不思議なことです。

鷺谷先生たちは調査をした結果、その原因をつきとめました。それはトラマルハナバチというハチが送粉するしくみにありました。

サクラソウの送粉はほとんどこのマルハナバチによっておこなわれます。サクラソウはその名前の通り、サクラと同じく五枚の花びらを持っています。その花びらの下に細長い筒があつて、蜜はその底にあります。そのため、たくて短い口を持つハエなどは、サクラソウの蜜を吸うことができません。また繊細な花なので、昆虫がとまると、花を支える柄^えがその体重でしななって、花は下を向いてしまいます。それでも蜜を吸えるのは、^{※ひんしょう}敏捷で長く丈夫な口を持つているマルハナバチだけなのです。

マルハナバチが暮らすためには、春から秋までずっと蜜を吸いつづけなければなりません。そのためには、早春しか花を咲かせないサクラソウがあるだけでは不十分で、そのあと次々にいろいろな花が咲きつないでくれないければなりません。つまり、多様な花を咲きつづ、豊かな群落が必要だということです。また、マルハナバチは林の地中にあるネズミの古巣などを使って巣を作りますから、ネズミなどがいるよい林も欠かせません。

サクラソウ群落が小さくなると種子ができなかった理由のひとつには、群落が小さくなると花の数も少なくなり、大雨や乾燥などのちょっとした異変でも全滅しやすいくつがあることがあり。そして、さらに重要なことは、実際に小さな群落を観察してみると、そこには送粉者であるマルハナバチが訪問していなかったということです。他と離れてポツンとした小さな群落には、マルハナバチも来てくれないようです。

この調査は北海道でおこなわれました。北海道の牧場では、家畜にもよくないために、殺虫剤が使われませんから、マルハナバチはわりあい元気に暮らしています。それでも、群落が孤立して小さくなるとマルハナバチは来てくれない

*

いのです。本州やそれより南では開発がはるかに進み、湿地は開発によって直接破壊され、北海道にあるような大きなサクラソウ群落はほとんど残っていません。しかも、田んぼや畑では害虫を殺すために殺虫剤を使うので、マルハナバチも無差別に殺してしまいます。それに加えて、残っていた群落もマルハナバチが来ないため、あるいはマルハナバチが来ても隣の群落まで遠すぎるために送粉してもらえず、種子ができないということが起きているのです。

このことはとても重要なことを教えてくれます。光があり、水があり、栄養があれば植物は育ちますが、サクラソウが生き続けるためには、それだけではだめだということです。送粉してくれるマルハナバチがいなければならず、マルハナバチが生きるためには、さまざまな花が咲きつないでくれる多様な群落が必要なのです。

ということは、サクラソウを鉢で育てればよいという考えは、A であるということです。湿地を守ればよいというのでは不十分です。背景になる群落、ネズミもすめる林、そうしたものがばらばらにはなく、まとまって配置されていなければならないのです。逆に言えば、健全なサクラソウ群落があるということは、こうしたことがすべて満たされているということを示しています。サクラソウ群落がたくさんあったかつての日本は、そうしたすばらしい自然を持つていた⑦ということです。しかし、それは、太平洋戦争のあとに急速に失われてしまいました。

⑧動物でも植物でも考え方はまったく同じです。ひとつの生物の生き方を正しくとらえると、必ずほかの生物とつながって生きているということに気づきます。ひとつの生物が絶滅することで、それとつながりを持つていたほかの生物も絶滅することが考えられます。たくさん生物の絶滅が同時進行することも多いのです。本当に動物を守るためには、あらゆる生物は自然界においてほかの生き物と複雑なつながりを持つていることを正しく知らなければならぬのです。

(高槻成紀『動物を守りたい君へ』より。一部改変)

(注) ※ 敏捷……動きがすばやいこと。

字数制限のあるときには、句読点や記号は一字と数えなさい。

(問二) — 線① 「掘」の太字の部分は何画目ですか。漢数字で答えなさい。

(問二) — 線② 「めっきり」の意味として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) どんどん (イ) きわだつて (ウ) だいたい (エ) しだいに

(問三) — 線③ 「はるかに」を用いて、主語・述語のとのった短文を作りなさい。

(問四) — 線④ 「喜びもひとしおです」とはどういう意味ですか。適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) いっそう喜びを感じられる。 (イ) いつも喜びを感じられる。

(ウ) 少しずつ喜びを感じられる。 (エ) たまに喜びを感じられる。

(問五) — 線⑤ 「群落が小さく……できていなかった」とありますが、その理由を *「」の中から二つ探し、答えなさい。

(問六) — 線⑥ 「サクラソウ」とありますが、サクラソウが生き続けるためには何が必要ですか。その説明として最も

適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 植物に必要な光と水と栄養を与えてくれる人が必要である。

(イ) 送粉してくれるハエやマルハナバチなどの昆虫が必要である。

(ウ) よく整備されたサクラソウだけの生息地が必要である。

(エ) 昆虫などさまざまな生物との関係や育つ環境が必要である。

(問七) A に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) とても適切 (イ) まったく不適切 (ウ) やはり確か (エ) たぶん不確か

(問八) — 線⑦ 「持つていた」の主語を文中から探し、書き抜きなさい。

(問九) — 線⑧ 「動物でも植物でも考え方はまったく同じです」とありますが、動物と植物に共通していえることを説明しなさい。

四、次の文章を読み、後の各問に答えなさい。

「一平、子犬をもらうか？」

学校へ行くと、克夫がすぐにやってきてそう言った。

「うん、もらいたい」

一平は即座^①に返事をした。

克夫のお父さんが、子犬を二匹もらってきたが、そのうちの二匹を、一平にやるというのだ。一平は嬉しくてたまらなかった。

勇治が、一平と克夫のやりとりを横目で睨む^②ように見つめていた。一平は、その視線に気づいたが、即座に返事をしていた。

勇治たちと克夫は、仲が悪い。勇治たちの住む本村の生徒たちと、本村を挟んだ両隣村の生徒たちは、何かにつけて対抗意識が強かったのだ。だから、一平が、隣村の克夫と親しくすることに、勇治たちはあまり嬉しそうな顔をしなかった。隣村といっても、同じ学区の小字^{こあざ}で、互いに何の根拠もない反発だ。しかし、そのことが一平にもだんだんと分かり始めていた。

それでも、一平は、勇治の視線を遮^{おかく}って、克夫の話を夢中で聞いた。

一平は、その晩、心を弾ませて、父に許しを願^③い出た。

「お前が、責任をもって育てるといふのなら、かまわないよ」

父は、笑みを浮かべて、すぐに許可してくれた。

「一平は、動物が好きだから、きつと可愛がってくれるよ」

母も、傍^{かたわ}らから、父の湯飲みに茶を注ぎながら相づちを打った。一平と打ち合わせていたとおりだ。

「やったあ！」

弟の洋平と孝が、一平の隣で両手を挙げて喜んだ。もちろん、一平も、バンザイをしたいほど嬉しかった。

克夫の家は、学校から二キロほど離れていた。本村を通って、山を登り、浜づたいに歩いた後、川を横切ると、克夫の住んで^④いる村に着く。克夫は、毎日この二キロ余の道を歩いて、学校へやってくるのだ。

村には、もちろん克夫だけでなく、同じ学年の智代も一つ上の昭夫もいた。小中学校の生徒たちが合わせて十数名ほど、この村から通っている。

村から学校までの道のりは険しく、人一人がやっと通れるような急な坂道を登ってやってくるのだ。

村の東端を流れる川には、橋は架か^かっていないかった。本村の東側を流れる川にも、橋は架か^かっていない。どちらの川を渡るときも、河口の浅瀬を選んで、ズボンの裾^{すそ}を捲^まって渡るのである。

二つの川は、雨が降ると増水したから、激しい雨の降る日などは、増水する前に生徒たちを家に帰すために、学校が臨時休校になることも度々あった。

一平は、克夫と一緒にその道を歩いた。時には、克夫に手を引かれるようにして、克夫の家にたどりついた。

「よく来てくれたねえ。大変だったでしょう」

克夫のお母さんが、お父さんと一緒に一平を待っていた。一平は、実際、こんなに長い距離を歩くのは初めてだった。疲れました」

一平が正直にそう言うと、お父さんとお母さんは顔を見合わせ、声を上げて笑った。

克夫のお母さんが勧め^{すす}めてくれた朱瓜^{あかぐり}の漬^{つけ}け物は、甘酸っぱい味がした。初めて口にする味だった。一平の顔を見て、二人はまた、笑った。

「克夫は、帰ってくると、一平君の話だけですよ」

克夫のお母さんは、始終笑みを浮かべ、柔和な顔をして一平をもてなした。

たくさんのあたたかいうちをなして受けながらも、一平の目は始終、庭で戯^{たわむ}れている二匹の子犬に注がれていた。一匹は、白い犬で、一匹は茶色だ。どちらも柴犬だ。克夫は、どちらの犬をくれるのだろうか。そのことが気になって

しよがなかつた。

二匹ともまるまる太っているが、両手で抱きかかえることが出来るほどに、まだ小さい。克夫が、二匹の犬を撫でながら、抱き上げたり頬ずりをしたりしている。

一平は、その仕草を見ながら、克夫は、本当は子犬を自分にくれたくないのではないかと不安になってきた。早くどちらかの犬を抱いて帰りたいかった。克夫の気が変わらないようにと、祈るような気持ちで、その仕草を見つめていた。

「克夫、決めたかね？」

お母さんの声に、しゃがんでいた克夫はすぐに立ち上がった。

「決めた」

克夫が、一匹の犬を抱きかかえてそう言った。白い子犬を抱えている。この犬がもらえるんだ。一平は、縁側から飛び降りるようにして克夫の脇へ駆け寄った。

「克夫は、一平君に、犬をあげるって楽しみにしていたのに、いざとなると決めかねてね。昨日から、どっちにしようかかって話ばかり……。まだ、二匹とも名前も付いていないのよ。一平君、可愛がつてあげてね」

「はいっ」

一平は、そう返事をして克夫の抱えている白い犬を見た。その犬を手に抱こうとすると、克夫は頭を振ってその犬に頬ずりをして、足元にじゃれている茶色の犬を、一平に示した。

「一平は、あの犬だ」

一瞬戸惑ったが、どちらの犬も可愛かった。間違えた恥ずかしさを隠そうとして、一平はすぐにしゃがんで、茶色の子犬の頭を撫でた。子犬はちぎれそうに尻尾を振った。可愛くてたまらなかつた。

子犬を抱き上げると、克夫と同じように腕に抱えて頬ずりをした。腕の中に抱くと、むくむくとした可愛い動きと温かい体温が伝わってきた。子犬を抱きながら、嬉しくて、ひとりでに笑みがこぼれた。早くここから立ち去りたかつた。

一平は、克夫と、克夫のお父さんとお母さんに丁寧にお礼を言った。克夫のお父さんは、白い犬は雄犬で、茶色は雌犬だと言った。お母さんからは、お土産に朱瓜の漬け物をもらった。

一平はもう一度、丁寧にお礼を言って、茶色の雌犬を抱いた。そして足早に帰路についた。何度か、後ろを振り返った。克夫の気が変わって、子犬を取り戻しに来るのではないかと気になったからだ。

村の家々が見えなくなつたところで、ホッとため息をついた。そして子犬に何度も頬ずりをした。

「メリ、メリにしよう！」

一平の頭に、突然子犬の名前が浮かんできた。どうして、そういう名前が浮かんできたかは分からない。弾む心のままに、そんな名前が口について出てきていた。早く名前を付けることで、自分の子犬にしたかつたのかもしれない。あるいは、異国風の名前を付けることが、子犬を育てるといふ異次元のような体験にふさわしいと思つたのかもしれない。

「メリ、メリ……、メリだ！」

口に出せば出すほど、この犬にふさわしい名前だと思つた。

白い砂浜を歩きながら、足裏に感じる砂の感触が、克夫の家に行くときとは違うように感じた。一步一步が大人になつていくような奇妙な気分だ。

波が、音を立てながら砂浜に打ち寄せていた。何度も何度も打ち寄せて、白い泡で模様を描いて消えた。その波を動かしているのさえ、一平自身のような気がした。

潮風が、一平の鼻腔をくすぐつた。一平は、メリを抱きながら、時折、目を細め、青い海を眺め、青い空を見上げながら、何度も何度も「メリ」と呟いて、また微笑んだ。

字数制限のあるときには、句読点や記号は一字と数えなさい。

(問二) — 線①「即座に」の意味として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- (ア) ただちに (イ) 勢いよく (ウ) ついに (エ) 喜んで

(問三) — 線②「勇治が……見つめていた」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- (ア) 隣村に住む克夫とは話さない約束だったのにそれを破った一平に怒っているから。
(イ) 本村と隣村の対立をよそに克夫と仲良く話している一平にいら立っているから。
(ウ) 隣村と本村の対立が根柢のないものだ馬鹿にしている一平が許せないから。
(エ) 本村に住む一平が隣村に引越してしまうのではないかと心配しているから。

(問四) — 線③「父に許しを願い出た」とありますが、何の許しを願い出たのですか。十字以内で答えなさい。

- (ア) 友人が見ていると緊張する。 (イ) すばらしい演奏に聞き入る。
(ウ) 根気のいる作業をやりとげる。 (エ) 去年から私の兄は東京にいる。

(問五) — 線④「この犬」・⑦「その犬」・⑧「その犬」・⑨「あの犬」の中で異なるものを一つ選び、番号で答えなさい。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- (ア) 一平にあげるの白い犬にしていたけれど、茶色い犬にしよう。
(イ) 一平にあげるの茶色い犬にしていたけれど、白い犬にしよう。
(ウ) 一平には白か茶色のどちらかをあげるつもりだったけれど、あげるのをやめよう。
(エ) 一平には白か茶色の好きな方を選んでもらうつもりだったけれど、ぼくが決めよう。

(問六) — 線⑥「この犬」・⑦「その犬」・⑧「その犬」・⑨「あの犬」の中で異なるものを一つ選び、番号で答えなさい。

(問七) — 線⑩「早くここから立ち去りたかった」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- (ア) もらえる子犬を勘違いしてしまったことが恥ずかしかったから。
(イ) 早く子犬を自宅へ連れて帰って自分の犬にしたかったから。
(ウ) 克夫が子犬を交換してほしいと一平に言い出して困ったから。
(エ) 克夫が一平に子犬を育てられるのか疑っていると感じたから。

(問八) — 線⑪「ホッとため息をついた」とありますが、この時の気持ちを説明しなさい。

(問九) — 線⑫「その波を動かしているのさえ、一平自身のような気がした」とありますが、その理由を次にまとめました。空欄に当てはまる言葉を文中から探し、アイは十八字で、イは八字で書き抜きなさい。

ア イに踏み出したことで イ イのように感じ、どんなことでもできると思いはじめたから。

問題は、ここで終わりです。